

総合人文科学研究センター研究部門
現代社会における「想像力」の総合的研究

2019年度第1回研究会の報告

日時：2019年4月26日（金）18時30分から20時10分
会場：戸山キャンパス33号館16階、第10会議室

このたびの「想像力」研究2019年度第1回研究会は「フィールドワークの現場で／からローカルなものを想像する営みについて考える」というテーマの下、公開で開催し、部門構成員を含む10名ほどの参加者を得た。今回は、大坪聖子先生（招聘研究員）が「文化遺産と想像力ーラオス南部ワット・プー遺跡地域の事例からー」という題目の下、話題提供を行った。異文化研究の方法をめぐって議論が交わされるなど、たいへん刺激的な研究会となった。なお、当初は2名の話題提供を予定していたが、都合により1名のみの話題提供となった。以下に、大坪先生のご執筆による当日のまとめを掲げる。

現在も伝統生活を営んでいる地域では、資本主義経済のグローバル化に伴い、都市化の進行や貨幣経済の定着化、さらには外界の接触により価値観の多様性が生まれ、伝統文化の崩壊が懸念される現象が起きている。

その一つであるラオス南部ワット・プー遺跡地域では、世界遺産に登録された2001年以降、観光開発が急激に進められ、遺跡整備による遺構の破壊、さらには遺跡に暮らす人の村が分断され、一部のコミュニティが消滅するといった問題が起きている。また観光客による人々の往来が頻繁になり、多様な価値観が流入し、伝統生活の変容や伝統行事の継承が危惧されている。しかしこの地域には先祖伝来の固有の文化や遺産を守る役割があり、さらには子孫に伝承していく使命がある。

この過去と隔たりなく現在を生活している人々には、未来を読むための「想像力」を育むことが必要であり、そのためには祖先から受け継がれてきた誇りである文化遺産への意識の向上が重要であると考えている。今後は発掘調査というフィールドワークの中で伝統生活に触れ、文化交流を通して「再生の道」を試みたい。（大坪先生記）

次回の研究会は、6月21日に開催する予定である。（報告取りまとめ：御子柴）